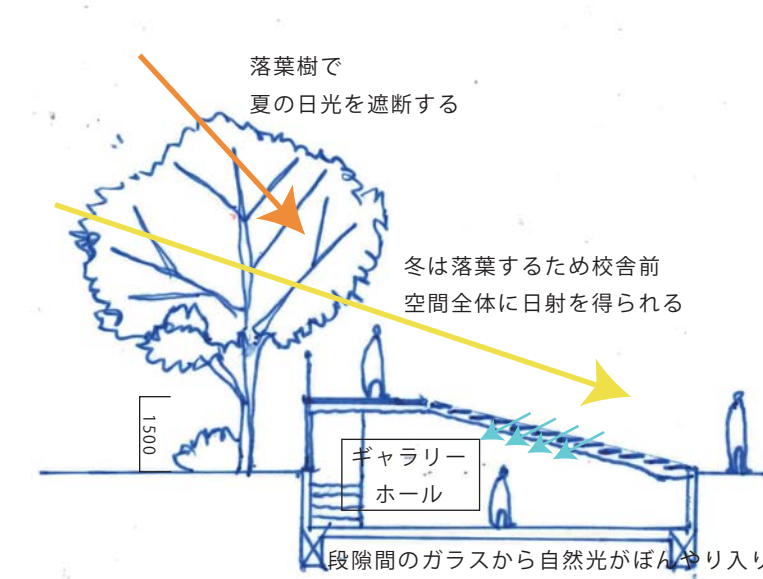
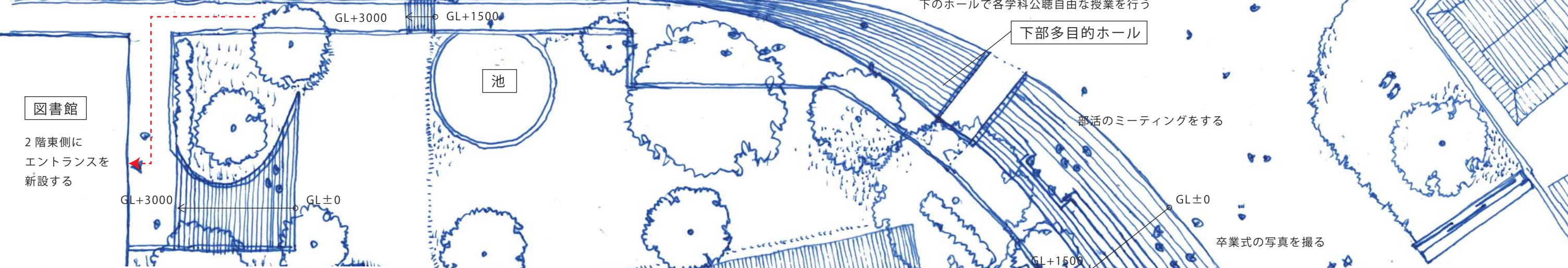
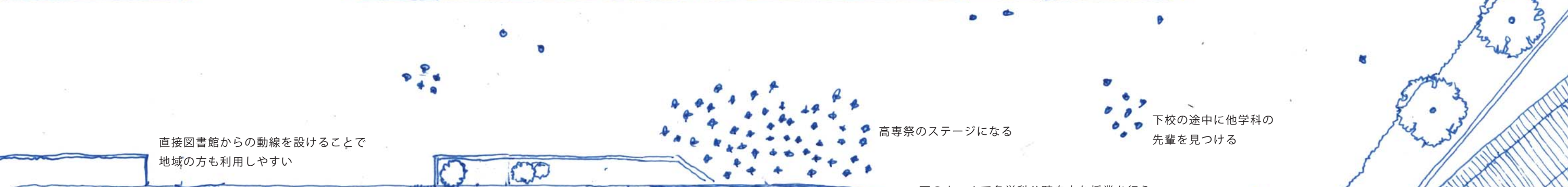
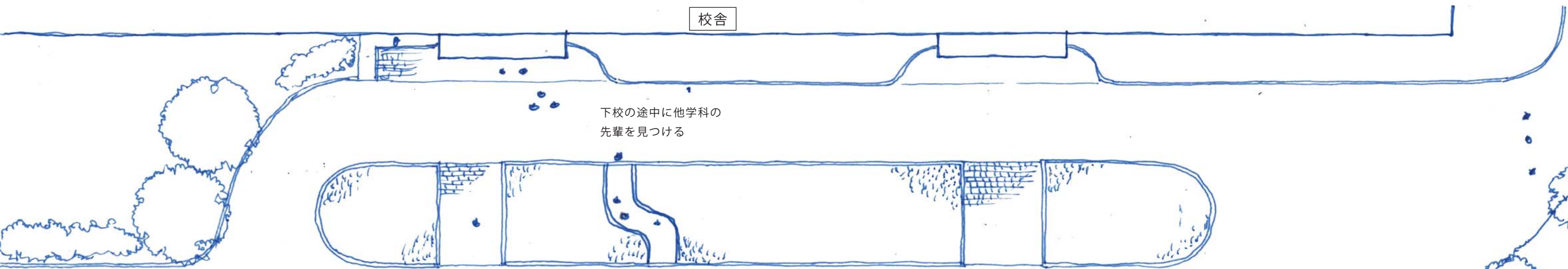


集の風景

私は正門前にたくさんの思い出がある。
入学式の後緊張しながら出会ったばかりの友人と歩いたり、部活の練習で仲間と走り回ったり、
高専祭で踊ったり、卒業式で先輩を送り出したり、送り出されたり。
日常的な会話から自然に各学科を横断する知識を蓄積してきた。
人が集まる風景の記憶こそが、全生徒全学科を横断する
明石高専の「知の集積」そのものではないか。



site
「全生徒が必ず毎日通る場所」
想定した場所は、全校生徒が必ず毎朝通る正門と校舎前の空間である。
必然的に人が集まるのにも関わらず現状では交流する場が作られていない。

「地域に対する学校の顔」
東面の正門部分はまさに地域に伸びる学校の顔である。
明石高専の校舎は正門に対して斜めに向いている。校舎への道が直線でないため、校舎前の空間全てが道になっていて、生徒が道を選ぶことができる。生徒が交流している風景を地域に対する「顔」にしたいと思った。

concept
「大階段が居場所と道を作る」
通学路に大階段を沿わせてみる。大階段が広場と新たな関係性を作る。少し顔をそむけたような配置とし、校舎と正対しずっと見合っているような居づらい関係を回避している。また、この階段が図書館への道を作る。地域の人々が高専へ訪れる場所を作る。高専をより深く知ってもらい、地域に愛される学校への「顔」とする。

